

2013 5/14

No.1946

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



オランダ船籍の豪華客船「フォーレンダム」(6万1214ト)が4月16日午後、横浜港に初入港した。外観は白と濃紺のツートンカラーが特徴。全長237m、乗客定員1850人。17日午後6時に函館に向けて出港した。



contents

視点・点描	3
「公の知的財産」を考える	
講演録	4
第4回神奈川TOPセミナー 「日本における周辺情勢」 第29代海上幕僚長 赤星 慶治	
経済反射鏡	7
プーチン政権の危うい基盤 資源高時代の終わり	
国際	8
再燃する住宅バブル圧力 中国新指導部、早くも試練	
国際	10
韓国経済政策に広がる困惑 「創造」乱舞で視界不良	
くらし2013	12
地域で楽しく終活フェア	
広告珍談	14
～うまい物がたり⑭ へびで作った？	
海外都市事情	15

事務局だより

◇横浜定例講演会

2013年5月15日（水）

13時30分～15時

ロイヤルホールヨコハマ

講師はコリア・リポート編集

長 辺 真一氏

演題は「どうなる 核実験後の朝鮮半島情勢と日本への影響」（仮題）

視点 点描



「公の知的財産」を考える

塵も積もれば山となる。会期が終了してしまった美術展のちらしや街の画廊の案内はがきは、関心のない人にとってはもちろん、美術愛好家にとってもたいした価値はないだろう。だがそれらの「塵」を丹念に集め、分類し、保管している人々がいる。それらが積もれば、未来の研究者にとっての「宝の山」となることを信じて、のことだ。

先日、取材した横浜美術館の「美術情報センター」（ひらたくい」と「図書館」なのだが、データベース公開も行っている。「美術情報」と称するのが昨今の流行らしい。美術書や雑誌、展覧会カタログなど所蔵図書はざっと10万冊。洋書や専門的な辞典も充実している。図書閲覧室の開架スペースにはうち2万冊が並び、壮観だが、筆者が最も感銘を受けたのは、

書庫の一角。「非図書資料」と呼ばれる展覧会ちらし、はがきがファイルされた棚だ。

有名無名を問わず、作家の五十音順に、館に送られてきた個展のお知らせ（案内はがきやちらし）がまとめられている。この中から将来、ものすごいビッグネームが出てくるかもしれない、こないかもしれない。それでもこれらは、21世紀の日本における美術活動の記録となる。情報が集まってくる美術館だからこそできる、全く目立たないが、大切な仕事。「公の知的財産、ですから」、案内してくれた人はそう説明してくれた。「塵の山」は、美術に限ったことではない。

横浜美術館とJR根岸線を挟んで反対側、紅葉坂にある県立青少年センター2階に、2005年生じた「演劇資料室」。ここでは、

横浜演劇研究所が1952年の創立以来継続して集めてきた演劇図書・資料を公開している（運営は神奈川県演劇連盟が担当）。戯曲はもちろん、演劇雑誌、各種団体の機関誌など、「演劇」に特化したミニ図書館だ。特に演劇雑誌のバックナンバーがずらりそろった書架（いずれも自由に手にとって閲覧できる）は、歴史を感じさせ、それを未来に伝えていくのだという気概も感じさせる。

県立図書館再編をめぐって、図書館はベストセラーの貸本屋でいいのか、という議論があった。それだけでいいはずはない。本や雑誌やその周辺資料を、個人の力では到底カバーしきれない「公の知的財産」と考える視点も欠かせない。

（神奈川新聞社

文化部長 青木 幸恵）

へびで作った？

いつの世もニセモノだらけ。ニセ医者にニセ建築家、ニセの鯛まで出現した。

宮内省ご用達になり、海外にまで進出していく味の素。たちまちニセモノ出現。1912（明治45）年1月の新聞広告で、ニセモノにご注意と訴えた。

《日に日に好評の声が高くなるに伴って、奸商輩の或者は垂涎して羨むで居りましたが遂に類似品を模造して味の○など、名称まで似せて発売する者が現れましたけれども、味の素^{味の素}は最新の学理を応用して純科学的製品で、到底一夜造りの模造品とは比較になりませんまい》と怒り、《すでに日本、英国、仏国、米国の各政府からそれぞれ専売特許権を付与され》、《宮内省御買上の光栄に浴し》、ドイツ・

ドレンデンの《万国衛生博覧会に出品する》。《我国食味界の革命児である》と賞賛し、食道楽の著者村井弦齋先生は舌を巻いて驚き且つ我料理界に功名を与えられたと云つて喜ばれた。

大正になつて、味の素の原料は蛇だとデマが流れた。なんのうらみがあるのか、風変わりなジャーナリスト宮武外骨^{みやぶけいこつ}は、自分が発行する雑誌『スコブル』に、へびのイラストを入れた広告風の記事をのせ、ありませぬことを書いた。もう一つの雑誌『赤』には、



「小麦だけではあの様な好い味は出ません」。「へーとばかりにビツくりして、だれも使わなくなる」と嫌がらせをした。

もちろん鈴木は、小麦などの植物の蛋白質から採ったグルタミン酸であると広告をくり返す。関東

大量に供出した。宮家の工場視察があると、広告で報じた。大正天皇が大山巖元帥に味の素を下賜され、ようやくへび説は消えた。

1926（大正15）年、新聞1

ページの大きな広告を掲出した。なぜか、でっかく大仏さま。コピーは《願はくはこれの功德を以て味よく一切を食べさせ玉へ》とは、いかなる意味か。その作者は寿屋（サントリーの前身）の宣伝部長・片岡敏郎。鈴木が懇願して制作したとか。原稿料はいかほどと聞くと、掲載料と同額と答えたという。その広告の掲載料は2200円、大学卒の銀行員の初任給は50円から70円。はたして広告効果やいかに。ある仏教団体から、仏陀を広告に使うとはよろしくないと抗議があつたという。

味の素の珍利用法を発表する人も現れた。すなわち、釣りの餌に よろしい。茶の葉と混ぜて足に塗ると、水虫の薬になる。とうとう、寝小使も治る！

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図）雑誌『スコブル』に載った 広告風デマ記事・1918（大正7）年10月